いずみさの昔と今 第320回

「収穫する～秋祭り～」

5月21日㈯から約3ヵ月間にわたり行われている、歴史館いずみさの春季企画展「耕す・育てる・収穫する」に関連して、3回目の最終回である今回は「収穫する」に注目していきます。

展示の最後を締めくくるこのエリアでは、長い柄を持つためしゃがまずに稲刈りができる「稲刈機」や稲の穂先からもみを外すために使用される「千歯こき」、風の力を用いてもみがらと、玄米を選別する「唐箕」をはじめとした稲の収穫から脱穀にかけて使用される農具を紹介しています。そこで今回は、「収穫」に関する行事について紹介していきます。

収穫の際に行われる行事で一番に思い浮かぶのは秋祭りではないでしょうか。秋祭りとは、春に行われる豊作を祈願する春祭りと対の形となり、農作物の収穫を神に感謝する祭の事を言います。旧暦の9月～11月（現在の10月～12月）にかけて行われており、神饌やお神酒で田の神様をもてなしていました。この田の神様は、秋祭りが終わると山へ帰り「山の神」となり、春になると「田の神」となり、また村に下りてきてくれます。名前が違いますが、実は同一の神様なのです。

そんな秋祭りの一つが「だんじり祭り」です。だんじり祭りの一つの起源として、岸和田藩3代目藩主岡部長泰が岸和田城内の三の丸神社に京都の伏見稲荷大社を勧請し、稲荷祭を行ったことが始まりとされています。この伏見稲荷大社は五穀豊穣の神として有名であり、また狐は神の使い、つまり田の神の使いであるという信仰があります。このことから、稲荷祭が起源とすれば、「だんじり祭り」も秋祭りの一つであり、収穫祭の一面があると考えることができます。

二つ目の収穫に関する行事は、「アエノコト」です。この行事は、石川県奥能登で12月に行われる霜月祭の一つです。農家の主人が祭事の中心となって、田の神様を家に迎え入れ、目には見えない神様をその場にいるように食事やお風呂でおもてなしをし、2月に神送りを行うという行事です。古くは、収穫祭は霜月に行われていました。その理由として、収穫祭を奉仕するに適した精神状態になるために、1ヵ月以上の長い物忌に服さなければならなかった為です。また宮中祭祀である「新嘗祭」もこの霜月祭りの一つであるため、日本古来の収穫祭りはこの時期であると考えられます。

時代が変わっていくように、私たちの暮らしも変わっていきます。しかし、先人が繋いできた知恵や思いは連綿と受け継がれていると思います。そんな受け継がれてきた知恵の一つを、民具を通してこの企画展で感じていただけると幸いです。

▲唐箕（館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・北前船文化を巡る⑥

～食野家邸宅跡（食野宅跡碑）～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

食野（めしの）家邸宅跡は、江戸時代に北前船や廻船業で財をなした豪商食野家の本宅跡です。現在もその跡地の一部は、第一小学校の敷地として残っています。小学校が開校した当初は、まだ食野家邸宅の建物の一部が小学校の校舎として利用されていました。現在は、もうその建物は残っていませんが、学校前に「食野宅跡碑」と当時の井戸枠が設置され、解説板でその面影を伝えています。また正門を入ってすぐのところにある松は、食野家の松だと伝えられています。

食野家は江戸時代の長者番付では鴻池、三井と並び称され、また井原西鶴の「日本永代蔵」にも登場、落語「莨（たばこ）の火」や佐野くどきの音頭になるほどで、今も本宅跡のある「佐野町場」は北前船の船主集落として、独特の町並みが味わえます。

▶食野宅跡碑と井戸の解説板

▶第一小学校前にある「食野宅跡碑」と井戸枠